様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２０６０

研究課題名（和文）地域婦人活動を契機とする農村女性の地位変容に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Women's Status Transformation in the Rural Society of Japan: Field Research on the Contextual Functions of Local Women's Associations

研究代表者
坂本　真司（Sakamoto, Shinji）

大手前大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：２０４２５０９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：戦後日本の農村女性の地位変容について、現地調査の結果をもとに、変容の実態や性格、その背景の解明に努めた。中心的なテーマは、女性の地位変容の契機として地域婦人活動が影響するかどうか、どのように影響するかを調べた。調査は2種類からなる。ひとつは、三重県伊賀市における生活改善運動経験者への聞き取り調査である。運動経験者たちが、地域おこしの担い手となって主体性を発揮している場合とそうでない場合を明らかにした。もうひとつは、長野県飯田市ほか複数地域における女性たちの人形劇サークルの調査である。サークル参加者への聞き取りと活動の参与観察を実施し、サークル活動が地域活性化に果たす役割について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
生活改善運動や公民館活動など、戦後日本農村の婦人活動への再評価が活発である。過疎化・高齢化が進む地域社会で、これら活動の経験者らが、現在高齢者となっても地域おこしへと積極的に関わっている。過去の成功体験が、今の頑張りをもたらしているとされる。この見方に対し本研究は、婦人活動が現代社会でどう継承され、現代どのような意義をもつかを調べた。生活改善運動経験者の地域おこし活動への参画状況を調べた結果、運動経験が参画に影響する場合と、そうとはいえない場合の両方が判明した。また各地の人形劇サークルを調査し、公民館活動からの歴史をもつサークルでは、その文化的影響力が地域で高く評価されていることが分かった。

研究成果の概要（英文）：This study examines the condition and background of the village women’s status change in the post-war Japanese rural society. The arguing point is contextual functions of women's associations. The study team performed two field research. One is interview survey with ex-members of the movement for the improvement of living conditions. The interviews were implemented at Iga city. The team investigated the cases some ex-members showed commitment as the leaders for the local revitalization events. Meanwhile it clarified other ex-members rarely showed the commitment. The other is the research on armature puppet-play circles. The research was performed at Iida city and other some locations. The team interviewed with the circle members and did participant observation in the circle activities. It explored the social contributions of the circle activities for the local revitalization and recognized that the popularity of the circle brings good effects to the circle members’ social position.

研究分野：社会学

キーワード：地域婦人活動　女性の地位向上　地域おこし　生活改善運動　文化芸術サークル　農村起業　人形劇　識字学級

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

周知のとおり現在の日本の地方社会では、過疎化・高齢化が進行し、集落の持続性が問題化されている。そこで集落を活性化させようと、地域おこし運動が実施されている。これら運動をめぐっては、メディアをとおして世論も関心を寄せる一方、本共同研究メンバーが属する社会学やその隣接科学ほか、学界においても関連研究が盛んである。

これら地域おこし運動の担い手をめぐっては、中心的存在として世論ならびに学界の両方で注目を集めるのが、地域在住の中高年女性たちである。特産物の栽培・加工ならびに販売までを手掛ける農村女性起業と呼ばれる活動、有志同人らによる文化芸術サークルが代表例にあがるが、各地においてこれら活動は、道の駅などで地域内外からの客を集める、イベント出演をとおして地域の魅力を伝えるなど成果をあげてもいる。「農の元気は女から」（靏 2007）とのフレーズもあるとおり、比較的高齢の農村女性らによるフットワークあふれるこうした動きが各地で展開し、地域活性化の起爆剤として、大きな関心と期待が寄せられている。

さて近年の社会学ならびにその隣接科学では、以上にみる現代地方社会の現状と展望をふまえて、戦後日本の農村女性による地域婦人活動への再評価論議が盛んである。その論旨は、かつての地域婦人活動を指して、現在の地域おこし運動にみられる農村女性たちの主体性の原初形態と捉え、活動の成功体験が、現在の「元気あふれる」地域おこしの背景として作用しているというものである。たとえば昨今の農村女性起業の場合、1950-60 年代の生活改善運動での活動経験が強く影響しているとされる。一方で文化芸術サークル活動の背景には、戦後登場した公民館を拠点とする社会教育活動をルーツとする見方がある。こうした学術動向をふまえ、我々は以下のような問題認識にしたがい本研究を進めていった。

当時の地域婦人活動には、大きく 2 つの狙いがあったとされる。ひとつは農家生活の合理化（伝統的生活習慣に備わる不合理性の克服）、もうひとつは農村の民主化（女性の地位向上）である。つまりこの活動の意義は、生活の合理化を女性が主体的に実現させる点にあった。そこでこの点に注意し地域婦人活動再評価論議を検討すると、当の意義をめぐって議論が不十分だと分かる。農家生活の合理化に関しては事例を用いた議論が多数あるが、その達成プロセスが、変革意志による女性の率先的な参加で具現したかどうかは、経験的な説明がみられない。この点を問題視することで本研究は、以下に示す目的の下、続いて示される方法で調査研究を進めた。

２．研究の目的

以上述べた前提となる研究動向と、そこから導かれた問題意識の下で本研究は、次の目的にしたがい調査研究を進めた。目的は大きく 2 つの側面に分けられる。第 1 に、戦後かつての地域婦人活動が、当事者である農村女性らによる変革意思に基づく率先的な参加に基づくものであったかどうかを吟味することである。そして第 2 は、このような率先性が認められるとして、こうした主体的行動の経験が、現在の地域おこしへの参画を促すものとして作用していたといえるかどうか、またどのような形で作用していたかを探ることである。これら 2 つのテーマについて、4 つの段階的な課題を設けて調査研究をおこなった。

1)戦後日本の地域婦人活動に関する先行研究を再検討し、農村女性の地位に関わるそれら先行研究の認識の仕方について整理をした。
2)三重県伊賀市と長野県飯田市を拠点にして、聞き取りと参与観察、歴史的資料の閲覧と情報整理を含む現地調査をおこなった。伊賀市では、生活改善運動の経験者への聞き取りと、当該地域での生活改善運動に関する歴史的資料の収集をした。一方飯田市では、地元住民によるアマチュア人形劇サークルのメンバーへの聞き取りをし、練習場所での参与観察と講演記録など関連情報を収集した。
3)収集データの分析から、地域婦人活動への参加が、女性の地位を変容させたのかどうか、またどのような形で変容が起こったのかについて暫定的な帰結を得た。
4)得られた帰結をもとに、かつての地域婦人活動が、当時の農村女性の暮らしに関わって有した意味を再吟味し、現代農村社会における女性の地位向上に関わる新たな知見の提示に努めた。

申請者 2 名はいずれも社会学が専門で、女性のコミュニティ開発に関する研究を続けてきた。そこで得た知見・視野・研究ノウハウを使い以上の調査が敢行できた。

また調査対象に関していうと、本研究開始当初では予定していなかった地域で、そしてインフォーマントに対する調査の機会が得られた。生活改善運動経験者の調査では、伊賀市における被差別部落の識字学級について調査することができた。

一方でアマチュア人形劇サークルに関しては、計画段階では飯田市のみであったが、関係者の協力を得て、他地域での調査もおこなうこととなった。具体的には、秋田県大潟村、千葉県船橋市ならびに大阪府枚方市のアマチュア人形劇サークルである。飯田市ならびに大潟村といった農村部だけでなく、船橋市と枚方市といった都市部でのケースについても調べることができた。

３．研究の方法

本研究はフィールド調査に基づいて進められた。研究代表者の坂本が生活改善運動経験者の調査、研究分担者の松崎は公民館活動経験者のそれを主に担当した。

生活改善運動経験者に対する調査は、三重県伊賀市を拠点におこなった。1 名の中心的なインフォーマントを選定し、インテンシブな聞き取りをした。加えて、上記以外の 3 名の在住者女性に対して、補足的な聞き取りをおこなった。また同じく伊賀市内の被差別部落地区で開講されている識字学級を対象に、学習への参与観察をしながら、同時に一部参加者への聞き取りをした。中心的なインフォーマント 1 名へのインテンシブな聞き取りは、当該インフォーマントの生活史を構築するために実施した。ほか 3 名の女性に対する聞き取りは、当該インフォーマントの生活史の正確性を期することと、関連事項を盛り込むことを目的に実施された。（詳細は「4.研究成果」の（1）を参照）

被差別部落の識字学級の調査では、部落差別により生活改善普及事業や新生活運動にアクセスできなかった被差別部落女性らが、従来知られる生活改善運動とは異なる独自の形で、生活の合理化と自身の地位向上を目指す活動をおこなったことが検討された。識字学級の歴史とその手法、現在までの成果について情報を得るとともに、現在識字学級が地域内外のイベントに参画し、差別根絶を訴えることで地域の持続性に積極的に取り組む実態が把握された。（詳細は「4.研究成果」の（2）を参照）

一方で、公民館活動経験者によるアマチュア人形劇サークルへの調査は、長野県飯田市を中心に、秋田県大潟村、千葉県船橋市、そして大阪府枚方市の 4 地点において実施された。これら 4 カ所でそれぞれ 1 団体を対象に、サークル代表者から聞き取りをおこなったほか、代表者以外のサークルメンバーや、人形劇関係者に対しても補足的な聞き取りをした。

サークル参加者・関係者への調査では、当のサークルの成立経緯について、公民館活動を代表とする地域での社会教育活動からの継続性ないしは継承性といった観点から情報を収集することに努めた。それに加えて、サークル活動の拠点である地域社会の変容とも関わらせる形で、現時点で当のサークルが、当該地域社会の活性化努力において社会的影響力を有するかどうか、またどのようにして影響力を示しているのかを探った。（詳細は「4.研究成果」の（3）を参照）

人形劇サークルへの調査では、当初計画段階で、長野県飯田市にて毎年開催されている世界的な人形劇イベント「いいだ人形劇フェスタ」の期間中に市中で場所を設けて、全国各地からサークル代表者や関係者を招いた公開シンポジウムの開催が目指された。全国各地のアマチュア人形劇サークルが、地域社会で根づくに至った背景や、現在の地域活性化へのインパクトについて、そして壇上者ならびにフロアから広くそして数多くのケースを学ぼうと準備が進められたが、研究期間続いたコロナ禍により、開催を断念せざるを得なかった。

４．研究成果

（1）三重県伊賀市での生活改善運動経験者の生活史調査

本調査は、三重県伊賀市内 S 地区（旧三重県阿山郡大山田村大字 S）でおこなった。S 地区在住者 N さんをインフォーマントに、調査期間中で 14 回（14 日分）かけてインテンシブな聞き取りをし、彼女の生活史を構築した。加えて、かつて N さんとともに村の婦人会に所属し、一緒に運動をしていた女性 2 名（他地区在住者）に、1 名は 3 回（3 日分）、残る 1 名は 1 回、同じく聞き取りをおこなった。これら 2 名に対する聞き取りでは、N さんからの情報の正確性を吟味するのと同時に、旧大山田村での生活改善運動への取り組みにまつわる各種補足的な情報を入手することができた。またほかには、現在伊賀市内にて婦人会活動に取り組む比較的年少の女性 1 名（他地区在住）を対象に、現在の地域婦人活動の現状について詳細を把握した。

N さんの生活史からは、彼女がコミットした生活改善運動では、S 地区住民の生活の合理化が果たされたといえる反面、農村の民主化すなわち女性の地位向上をめぐっては、運動が積極的に関わることはなかったとの見方が得られた。S 地区はじめ大山田村で当時、婦人会により村内全域的に取り組まれた活動は、料理教室であった。安価で栄養価の高い食材を用いた料理の技能を会得することで、集落住民の健康増進が企図された。近代的な食生活を実現させる能力が、地位向上につながると期待されていた。しかし聞き取りから分かったこととして、この料理教室を N さんは、姑による家事への権威主義的統制への反発、そして家事における主導権獲得の手段と位置づけ、意欲的に参加した。スキルを磨き、家庭の食事にて反映させることで、姑以上に家事遂行能力があることを誇示し、夫ほか周囲の者たちの承認を得る。そうして最終的には、家計上の権限獲得（サイフをもつ）に成功した。

以上の調査から暫定的な結論として、N さんの生活史において生活改善運動は、家父長制が強く作用し、ジェンダー不平等が随所で顕現する農村社会における女性の地位向上、つまりムラの男性たちとの関係を文脈にした女性の地位向上を具現させるものとは認められなかった。むしろ女性集団内部での分断を招きうる事象として、女性解放とは似ても似つかぬ方向性をもったものと捉えられる。そしてこの点をふまえて生活改善運動の現代的な影響力に目を向けると、S 地区の場合、生活改善運動の経験は、地域おこしにおける女性の主体性に関わるものではなかったといえる。S 地区では 2000 年代に入り、各世帯でこんにゃく芋を栽培し、この芋を使って手作りコンニャクを作り、地元温泉施設で販売する事業が行われていた。この農村起業活動はしか

し、地区の男性世帯主が中心となったもので、女性たちは周縁的な作業（栽培での補助的役割）に終始した。栽培、加工・製造、販売で口を出すことが出来ず、男性たちの命令のもと下働きをさせられ続けた。こんにゃく芋を栽培する畑は元来、自家消費用蔬菜づくりを担う女性たちの躍動の場とみなせるが、それでもＮさんほか女性たちは、コンニャクビジネスでイニシアティブをもち、地域おこしに参画することがなかった。農家の食生活を成り立たせる畑が、カネを生み出すビジネスの場となる、このような生活構造の変容において、畑作の担い手である女性が主体性を発揮することがなかった。かつて生活改善運動は、男性を巻き込む形で女性の地位向上を促すことがなかった。S 地区の実情からは、生活改善運動での活躍が女性の地位向上をもたらし、こうした成功経験が今度、地域おこしにおける女性の躍動を促すとの継続性ないしは継承性の図式は認められなかった。(以上の成果の詳細は「５．主な発表論文等」にある[坂本 2020]を参照）
（坂本真司）

（2）三重県伊賀市内被差別部落の識字学級の調査
一方で生活改善運動の経験と、地域おこしへのコミットメントとの関係性については、(1) の調査と同じく伊賀市内にて、被差別部落地区で開講されている識字学級を対象にした調査からも検討が加えられた。調査は、同市内「いがまち人権センター」で開講されている「しらさぎ識字学級」において、学級活動への参与観察と一部クラスメンバーへの聞き取りがおこなわれた。2019 年 7 月には学級運営に関わるセンター職員 2 名に、識字学級開講の経緯やカリキュラム編成といった予備的な知識に関わる聞き取りをおこない、以降同年 9 月と翌 20 年 1 月の 2 回（2 日分）の機会を得て参与観察をしながら、出席者に聞き取りをした。
差別が原因で学校に通えないまま成人化し今に至る高齢女性たちは、本識字学級で識字学習（被差別部落における生活改善）に取り組み続けてきたといえる。一般的な認知をふまえていうと、生活改善運動とは、農林省（当時）がおこなった生活改善普及事業により機会が提供された各種活動（台所改善など）や、新生活運動協会のサポートによる新生活運動を指すが、しらさぎ識字学級に通う高齢女性たちはかつて、これらの事業や活動に、差別ゆえにアクセスできなかった。調査からは、このような当時の状況も把握され、これらの事態も経緯となって彼女らは、識字学級での学習に積極的に取り組んだとの見方が得られた。こうして、従来知られる生活改善運動とは異なる独自の形で、生活の合理化と自身の地位向上を目指す活動が地道に続けられてきたことが把握された。
そして現在本学級は、地域おこしをテーマとした各種イベントにて展示会などを開催している。具体的には、学校行事（文化祭や学校間交流行事など）を筆頭に、地域内および地域間の交流をはかっている。イベントへの参加では、クラスメンバーはお揃いの T シャツを着て、自分たちの活動の歴史をアピールすることもある。その T シャツには、参加者の女性が子ども時代に学校教師から受けた差別の経験がつづられている。つまりそこには、部落差別で学校に行けず読み書き能力を欠くことで長年生活上の困難に苦しんだ人たちが、学級活動で差別経験を克服しようとしていることへの誇りがメッセージ化されている。このようにして識字学級の女性たちは、地域内外の子どもたちやその保護者らといった次世代層に対し、差別に負けない地域としてその持続性を主張しつつ、関係づくりに積極的に取り組んでいる。以上は、生活改善の成功経験に基づく、継続的・継承的な実践の事例といえよう。（「５．主な発表論文等」にある[坂本 2021]にて、上記調査成果の一部が議論されている。）

靏理恵子，2007,『農家女性の社会学――農の元気は女から』コモンズ.
（坂本真司）

(3) 長野県飯田市含む 4 地域でのアマチュア人形劇サークルへの調査
本調査は、1970 年代の児童文化運動隆盛期を中心に活動を開始した母親を中心とする女性の人形劇サークル 4 団体に対し、聞き取り調査にて、団体創立の経緯、活動内容とその変遷、参加者および人形劇活動への意識、現状と課題などを把握する目的でおこなった。以下に、4 団体の調査結果の概要を述べる。
・枚方人形劇連絡会（大阪府枚方市）
家庭学級で人形劇に出会った母親たちが、人形劇を通して主体的に地域で行動していくことを求め、行政に人形劇講座開催を要望した。その講座受講者によって誕生した人形劇団により、1976 年に連絡会は創立した。本連絡会は、市民に人形劇を楽しむ場・機会を提供するために、行政と連携して定期公演や人形劇フェスティバルを立ち上げた。これらは現在も継続して開催されている。
・船橋地区人形劇連絡会（千葉県船橋市）
高度経済成長期、船橋市内では、教育への高い関心と地域コミュニティを求める専業主婦らの人形劇団が複数誕生した。こうした動きを受け公民館主催で開催した人形劇フェスティバルをきっかけに、これに参加した劇団によって、1975 年に連絡会は創立した。本連絡会は、市内での人形劇文化普及の活動にとどまらず、海外の人形劇フェスティバルにも参加し、人形劇を通した日本の文化紹介など国際的な文化交流にも積極的に取り組んできた。
・東野人形劇あかね（長野県飯田市）

劇団は、「人形劇のまちづくり」を目指す行政の文化政策の一環として、1992 年に東野公民館に創立した。かつて子ども劇場で人形劇に取り組んだ経験のある育成委員の他、参集したメンバーは全員女性で、仕事を持つ母親であった。仕事や家庭との両立のなかでの人形劇活動への取り組みは困難であったが、メンバーとのささえあいや上演活動による充実感が活動への取り組みを継続させたとし、「人形劇のまち飯田」の劇団としての誇りを持っている。

・大潟村人形劇同好会「八郎」

劇団は、八郎潟の干拓によって生まれた大潟村に全国から入植した若い母親らによって、1977 年に創立した。当初は母親同士の仲間づくりが目的であったが、活動を継続する中で、人形劇の魅力を感じ作品づくりに熱心に取り組むようになった。各人が得意分野で力を発揮する協働的な取り組みがみられ、自分たちの創り出した作品を文化として次代に継承したいと新たなメンバー募集に積極的である。

4 団体への調査から、人形劇活動が女性たちにもたらした役割や成果として、次の 3 点が挙げられる。1 点目は、わが子の存在が母親同士をつなげ、文化活動への取り組みを生み出した。そして、活動継続を通し「わが子のために」からより広く「子どもたちのために」という意識の拡がりをもたらした。2 点目は、人形劇活動を通した自己実現の喜びが自分の存在意義を自覚化させ、さらなる向上を目指したり前向きに生きる姿勢を生んだ。3 点目は、人形劇を通して自分の世界を拡げ、主体的な市民としての育ちがもたらされた。

こうした成果からは、かつての児童文化運動を、子育てを女性に不当に押しつけた実態としてマイナス的に評価するのではなく、深井（1977）が述べたように創造的な新しい女性の運動であったと評価できるといえる。(以上の成果詳細は、「５．主な発表論文等」にある[松崎　2022]を参照)

深井耀子，1977,「地域における児童文化の創造-西日本における家庭文庫・地域文庫・親子劇場運動-」,『月刊社会教育』No244, pp.16-22

（松崎行代）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 坂本真司	４．巻 13
２．論文標題 過疎集落の持続性と農村女性の地位向上の契機―起業論を超えて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 理論と動態	６．最初と最後の頁 116-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂本真司	４．巻 28
２．論文標題 第三期部落解放運動と差別の記憶	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島部落解放研究所紀要　部落解放研究	６．最初と最後の頁 73-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松崎行代	４．巻 18
２．論文標題 地域の文化活動に取り組む女性たち－アマチュア人形劇団の活動を事例として－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	６．最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 坂本真司
２．発表標題 過疎集落の持続性と農村女性の地位向上の契機―起業論を超えて
３．学会等名 関西社会学会第71回大会（於．龍谷大学）
４．発表年 2020年

１．発表者名 坂本真司
２．発表標題 生活改善活動と農村女性の社会関係
３．学会等名 令和元年度日本生活文化史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松崎行代
２．発表標題 母親を中心とした人形劇団の活動とその意義
３．学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松崎　行代 (Matsuzaki Yukiyo) (60465854)	京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関